

■平成二十六年 孟蘭盆施食会法話

孝順心と行持報恩

善光寺住職 黒田博志

前回は、『孟蘭盆経』より目連尊者が父母のご恩に報いるため餓鬼道に墮ちて苦しむ母を救済せんとした故事に因んでお話し上げました。今回は万人共通、親をもつ子の立場から「孝順心と行持報恩」について、二つの仏事供養を申し述べたいと思います。

ひとつは先祖供養。最も身近な方への報恩供養です。ご先祖さまや兄弟縁者に対するいわゆる縦の系統への供養です。

いまひとつはありとあらゆる御霊に対する供養です。これは施食供養と申します。たとえ直

接のご縁でなくとも、間接のご縁をいただいていた方々、目に見えないけれども諸々恩人に対して、さらに、生きとし生けるものすべての御霊に対してのご供養。これは横の系統の供養となります。

最近、新聞紙上に皆さまご承知の北海道での吹雪の中悲しくも美しい親子の愛と絆の事故に関連した記事がありました。ここに紹介します。

《記事の抜粋》

作家、故麻生路郎氏の章句に、『昔とは父母



のいませし頃を云い』

長命の両親に恵まれ、いつまでも「昔」を顧みずにいられる人は幸せである。母親を病気で亡くし、ときに小学三年生の少女は漁師の父親と二人暮らしをしていた。北海道湧別町で激しい吹雪のなか、進路を絶たれ動けなくなった親子、父親は娘をかばい、覆いかぶさるように抱いて一夜を過ごした。翌朝発見されたとき抱かれた娘は助かり、父親は自らの命とひきかえに死亡した。やがて回復した娘さんから『応援してくれた全国の皆さまへ』と本紙に託したお礼の手紙を読んだ。いまは同じ町内の親戚の家で暮らしている。——わたしは今とても元気で好き、また時折連れていってもらう温泉が好き。——十歳の胸に抱く「昔」は、それでもやはり重たいのだろう。ベッドで、父の優しい顔が浮かんできて涙が出て止まらないこともあるとい

う。そのように手紙は結ばれている。また夏音ちゃんは、お父さんが遠くから安心して見守ってくれるよう、人を想える大人になれるようがんばりますと。きつと天国のお父さんは目を細めて泣いていることだろう。

さて私が大事に思う經典に『父母恩重經』というお経がございます。

そこには「父母の大恩重きこと天の極まり無きが如し」という徳目があります。文字通りお父さんお母さんから頂いた恩はきわまりなく重たいものであると教えています。当り前のことですが、それが当り前にいかないから論しているのです。

親の存命中はその重さや敬いの心をもつことはとても出来ないことです。親からいただいている恩は気づかないことだらけです。お父さんお母さんが子のためにすることが当たり前と感

じてしまっているのです。だから気付く事ができません。親はわれ省みず唯々、子を愛し子の無事を念じているからですよ。

私も人の親になってまだ一年半です。こんなにも一人の子を育てることが大変なことだったのかと感じております。

生まれて間もないとき毎晩夜泣きがあり、なんで泣いているかも分からず、ひたすらに抱っこをし、あやし続けても泣き止まず、途方にくれてしまいました。いつまでも泣き続け、その迫力と飽くなきパワーに感心させられたり、親の立場はほんとうに大変なんだと漸くわかりかけています。

翻って私も親の子、やはり同じであったのかと省みながら子どもの無邪気な笑顔に救われつつ毎日成長させていただきたいと感じております。

この經典には父母に頂いた、ご恩にどのよう
に感謝し行持報恩すればいいのか順々と教えて
ございます。

十ヶ条のご恩を示しています。

一、懐胎守護（かいたいしゅご）の恩、十月十
日母はお腹の子を思い、身も心もくだいてお守
りくださる恩。

一、臨産受苦（りんさんじゆく）の恩、母は子
を出産の時、陣痛の苦しみに耐え忍び、わが子
をお守りくださる恩。

一、生子忘憂（しょうしほうゆう）の恩、出産
し赤子の顔を見るときは心身の苦しみを忘れ、
お喜びくださる恩。

一、乳哺養育（にゅうほよういく）の恩、自ら
の血液、母乳を与え、養育してくださる恩。

一、廻乾就湿（えけんじゆしつ）の恩、母は汚
れた所に寝て、乾いた所へ我が子を寝かせてく

ださる恩。

一、洗濯不淨（せんかんふじよう）の恩、子が
排泄した不淨物を、洗い浄めてくださる恩。

一、嚙苦吐甘（えんくとかん）の恩、自らは粗
衣粗食に甘んじ、子には美味な食物をくださる
恩。

一、為造悪業（いぞうあくごう）の恩、子に代
わりたとえ地獄におちても子の幸せだけを念じ
てくださる恩。

一、遠行憶念（おんぎようおくねん）の恩、親
を離れて子が旅をするとき、我が子の無事を念
じてくださる恩。

一、究竟憐愍（くぎようれんみん）の恩、父母
はただひらすら我が身に代えて子を守り死んで
もなお、後々までお守りくださる恩。

このように多くのご恩を示してございます。

今、私がありますようにこうして生かさせ



て頂いております。

かりそめにも自分の力で生きていると思っ
てはいけません。また、人間いつ不測の事態
にならぬとも限りません。思いがけぬはいのち
の存在。このお経は有難きいまの存在にそのひ
とつひとつ教え諭し気づかせてくれます。

私も父を失ってよりありがたさと尊さと父の
存在の大きさを痛いほど感じています。さらに
子が親の恩に報いるにはどのようにしたらよい
かが『父母恩重経』には示してあります。

「父母のこの世にいます時にこそ、真心こめ
て安心しよろこんでいただけるようつくすべ
し、不慮にして父母なきときひたすらに追善供
養おこたらず、生けるが如く仕へ奉りこの心も
て、あまねく人を救はんと、慈悲のいとなみ励
むべし。およそこれらを以って父母の恩に報ず
となす。」とあります。

教えに従い皆さまと私、いまここに坐することまこと、感謝報恩追善の供養となっているのでございます。

「孝順心」という教えがございます。

かつて永平寺を開かれた道元禪師さまの一番弟子に懐契えいじやくさまという和尚さまがおられました。懐契さまは道元禪師さまがお亡くなりになられた後も、ご身命尽しご生前中と変わららず、あたかもそこにいます如くにお仕えされたそうです。

永平寺では道元禪師さまがお亡くなりになられて七五〇年になりますが、今も変わることなく、懐契さまが道元禪師さまにお仕えしたように日々刻々行じております。

どのように行じているかと申しますと、朝は三時半起床。担当の和尚さんはそれより先に三時より道元禪師さまのお部屋とお像をお清め

し、お清めのときご身体の部分によってタオルを替えます。お清めが終わりますと、お像の前にご靈膳、抹茶、蜜湯（砂糖湯）をお供えし感謝報恩の誠を尽します。この勤めは、朝・昼・夕と三百六十五日絶えることはありません。そして、夜八時には、お休みの挨拶とお拜を行っています。

これこそ「孝順心」です。孝を尽しても尽しても、なお足りぬ素直な心を尽しきる。これが道だと教えていただきます。これより先も変わることはありません。この在り方と心が仏の道なのでございます。

永平寺において道元さま祖師さま。各寺において歴代住職さま。家にあつては父母先祖さまです。そしてその先にはお釈迦さまに続く道があるのです。

お盆は大事なご先祖さま、或いは父母、縁者さまとともにお過ごしする一大行事です。身辺



のお掃除をしてお清めし、心もきれいにしてお
迎えいたしましょう。家族みなでお迎えいた
しましょう。そしてご先祖さまにお心いたして
どのようにお迎えし、どのように過ごし、どの
ようにお見送りをしたら最善なのか皆さままで考
えましょう。ご先祖さまも帰ってきてよかった
とお思いいただくお盆に致しますよう。

ご清聴ありがとうございました。



